

IAF アジア・マレーシア大会 2019

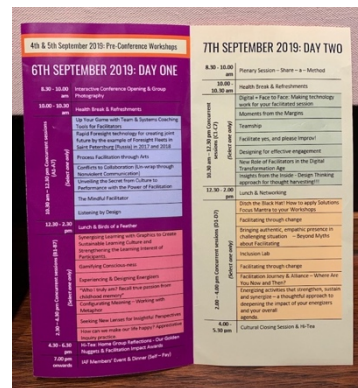
報告レポート 【FAJ 会員派遣事業】



平井 翠
Hirai Midori

1994 年大阪出身。
現在、ダイバーシティ推進コンサルティング会社に勤務。ファシリテーションに出会ったのは約 1 年前、IAF アジア日本大会 2018 への参加がきっかけ。ファシリテーションのスキルの提供側として、ファシリテーションに関する学びを深めたいと思い今回スカラーシップ生として参加。長所はとにかく凹まない、持ち前の明るさ。

科会がいくつも用意されており、参加者は自分の興味のあるものに参加することができる。



2019 マレーシアカンファレンスのタイムスケジュール

スカラーシップの私たちが参加したのは、本大会の 2 日間。全ての分科会が全員参加型のため、退屈なものはなく、どの分科会も参加者の熱心な対話が繰り広げられた。分科会だけでなく、最初のオープニングや分科会の間の休憩時間、“Bird of Feather”のランチタイム、2 日間休まることなく、有意義な時間を過ごすことができた。

IAF アジア・マレーシア大会とは



IAF とは全世界のファシリテーターたちが集まる国際ファシリテーター協会、IAF (The International Association of Facilitators)

IAF では、世界中のファシリテーターたちとの情報交換、スキルアップ、ネットワーキングの場として、毎年大会を開催している。今年、アジア地域ホスト国はマレーシア。全 4 日間開催される大会では、プロのファシリテーターたちによる分

IAF アジア・マレーシア大会の概要

＜開催日＞

2019 年 9 月 6 日(金)・7 日(土)

※プレは 4 日(水)・5 日(木)

＜開催場所＞

マレーシア クアラルンプール市内

“The Saujana Hotel”

＜参加者＞

約 200 名（マレーシア、シンガポール、日本、中国、韓国、台湾、インドネシア、インド、タイ、香港、オーストラリア、アメリカ、ロシア、メキシコ他）※日本からは約 20 名が参加

1. Conflicts to Collaboration (A4)

今回、計 4 つの分科会に参加。最初は、NVC を用いたワークショップに参加した。NVC（Nonviolent Communication = 非暴力（共感的）コミュニケーション）とは、コミュニケーションにおいて相手とのつながりを持ち続けながら、お互いのニーズが満たされることを目指して話し合いを続けていくという、共感を持って臨むコミュニケーションの方法である。



ホスト: V Narasimhan(India) Reena Ginwala(India)

コンフリクト（衝突）が生じたときには

- ✖ 頭（思考）で判断・批判・分析・取引する
- 人を思いやる気持ちを持って（共感力）自分自身と相手の心の声に耳を傾ける

また、NVC における重要な 4 要素として、

- ① 観測（observations）
- ② 感情（Feeling）
- ③ ニーズ（Needs）
- ④ リクエスト（Request）

上記 4 つの要素を明確にしていくことで、お互い

が気持ちよく良い関係を築くことができるという。

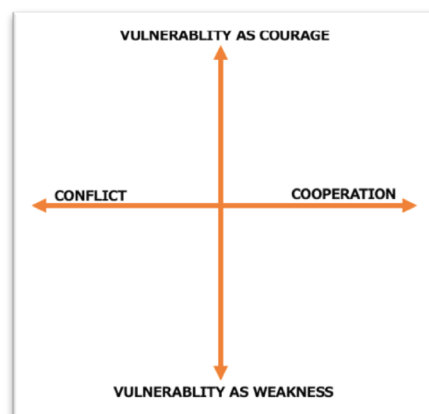
① 観測（observations）

自分の主観的な評価を切り離して、自分に影響を与えている事柄について言語化する。

② 感情（Feeling）

その事柄について「自分はどう思っているか」ではなく「自分はどう感じているのか」、気持ちを言葉で表現する。

ワーク：衝突と協働ー脆弱性マトリックス（図 1）

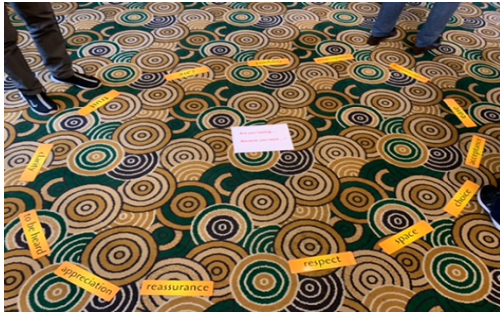


他者との衝突時の自分の立ち位置を 4 つの象限で表現する。解決のためには図 1 右上の領域を目指すことが重要である。

③ ニーズ（Needs）

感情（さみしい、不安、悲しい）から、自分が大切にしているどのような価値とぶつかっているのか、どんな必要が満たされていないのかを見つける表現する。

ワーク：「Are you feeling... Because you need...?」（写真 2）



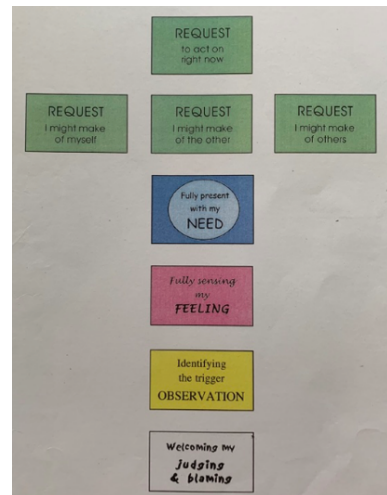
自分の感情がどの価値観から来ているのか相手に問いかけてもらいながら、自己内省するためのワーク。感情（例えば happy）の元となる自分の価値観を知るために、相手から「Are you happy because you need choice?」と、問いかけてもらう。価値観の書かれたカード（写真 2）から「choice」を選択して問いかけているが、価値観カードにはたくさん種類があるため、もっとも今の自分に当てはまる価値観を選択することができる。



④リクエスト (Request)

相手が何をしてくれれば、自分の問題が解決してハッピーになるのかを、具体的で実行可能なお願いとして依頼する。

自分の要求をわかりやすい形で相手に伝えることで、相手が行動しやすくなり、その結果自分の満足に近づく。



NVC ステップ

分科会への参加を終えて

空気を読んだり、察することが美徳とされる日本では、NVC のように自分の感情を素直に伝えることのハードルは高いと感じた。しかし、相手の本意を確かめないままに物事を進めていくことは、気づくとそこには相手との間に深い溝ができてしまっている可能性もあるかもしれない。NVC のプロセスはアンガーマネジメントと似ていると感じた。怒り・葛藤が自分の中で起きた時の対処方法について、比較しながら今後学んでみようと思う。

2. Who I truly am? (B4)

~Recall true passion from childhood memory

幼少期の自分を振り返ることで、自分の本来もつ情熱や潜在能力見つけ出し、今後のキャリア形成に活かす、というワークショップであった。

本ワークショップホストである Tul Lekutai (Thai) は、自分の子供の頃の情熱（＝漫画を描く）が現在のキャリアに結びついていたことを思い出し、潜在能力を見つげるための4つのプロセスを編み出した。

4つの重要なプロセス

- ①メモリのリコール
- ②ストーリーの保存
- ③マッピング
- ④一貫性アクション

上記プロセスをいくつかのワークを通して、楽しく学ぶことができた。

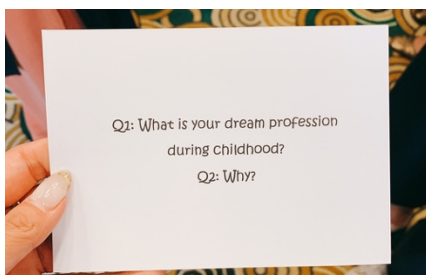
①メモリのリコール（名札作り・自己紹介）



配布された名札に、幼少期の自分のニックネームと自画像を描いた。自画像には、そのときの自分の特徴がわかるような絵を描く。（私は、外遊びが好きでやんちゃ娘だったので、鼻に絆創膏とセミを描いた）

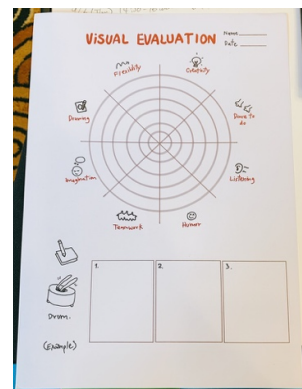
自分の出身国や年齢・実名は一切記入せずに自己紹介をするため、初対面の相手でも幼少期の自分（飾らないありのままの自分）で話すことができた

②ストーリーの保存（過去の自分は？）



1人1枚、上記のような写真が配布され、1to1で過去の自分についてをお互いに質問し合った。（Q1:What is your dream profession during childhood? Q2 :Why?）

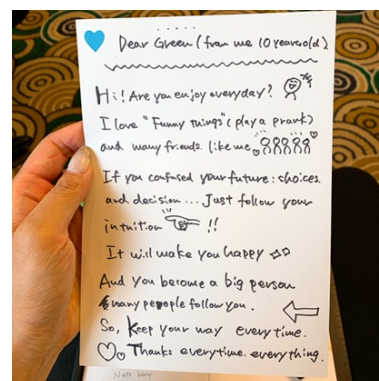
③マッピング（自分の強みと特徴）



幼少期の自分の強みをレーダーチャートに記入し、幼少期の自分の特徴を表す絵を3つ描いた。レーダーチャート上には「Flexibility,Creativity,Dare to do,Listening,Humor,Teamwork,imagination,Drawing」といった選択肢がある。

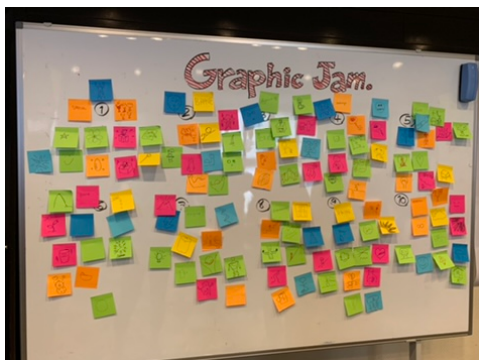
④一貫性アクション（未来レター）

10歳の時の自分を思い出して、10歳の自分から今の自分に向けた手紙を描いた。最後には、1人ずつ、レーダーチャートと、未来レターを全員場でシェアした。



分科会への参加を終えて

実は他にも「Graphic Jam」という、抽象的な単語から連想される絵を20秒で描く、というワークが1番個人的には面白かった（写真）



例

例えば「pure」という単語を表す絵を描いた時に、ある人はコップの水を、ある人は新芽を、他にも赤子を描いた人がいた。抽象度の高い言葉には、ひとそれぞれ連想される範囲がかなり広く、過去の経験に基づいているため回答にも多様性があふれている。特に、どれかが間違っているわけでもないの、「これ、何？」という絵も中には存在し、またそれを聞いてみることの楽しさもある。

3. New Role of Facilitators in the Digital Transformation Age (C6)



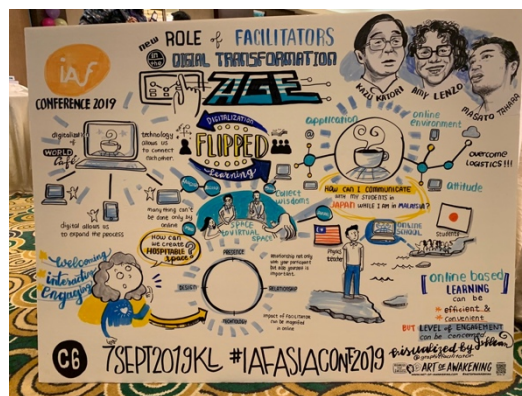
ホスト：香取一昭(Japan)、田原真人(Japan)、AMY LENZO(USA)

2日目の分科会では、オンライン会議システム“ZOOM”を使用したハイブリッドオンラインワー

クショップに主催者側のサポートとして参加した。

オンラインファシリテーションで得られるスキル

- ① Presence（オンラインファシリテーターの存在意義）
- ② Technology（システムの使用方法）
- ③ Relationship（オンライン上での関係性構築）
- ④ Design（オンラインワークショップの設計）



オンラインファシリテーションの長所と短所、今後の可能性について

分科会の中では、ワールドカフェを実施し、オンラインファシリテーションに対する様々な意見を聞くことができた。（一部を記載）

<長所>

- ・場所を限定せずに開催できるので、様々な地域・国の人が一緒に参加できる
- ・ブレイクアウトセッションによるグループワークができるため、分科会がオンライン上でできる

<短所>

- ・プライバシーの問題（盗撮や盗聴）
- ・セキュリティの問題（個人情報の流出）

<今後の可能性>

- ・5Gの台頭による、より快適なオンラインプラットフォームの確立
- ・ZOOMに翻訳機能が付いて、国を越境したグローバルなコミュニケーションが可能になる
- ・手話にも対応可能になる

分科会への参加を終えて

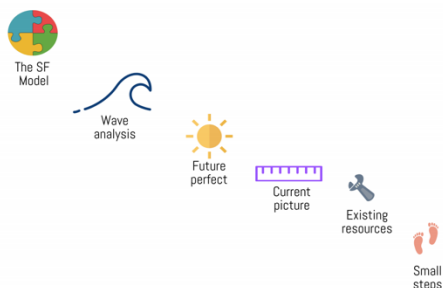
今までファシリテーターたちの活躍場所は物理的な場所に限られていたために、オンラインハイブリッドワークショップは彼らにとって関心高いものであることがわかった。

今後の IT 技術のさらなる進歩によって、世界中の人々がつながることができる未来を考えるだけで、とても興味深く、ワクワクした。

4. Ditch the Black Hat! (D1)

~How to apply Solutions Focus Mantra to your Workshops~

オーストラレーシア全域で活動するファシリテーターおよびチーム開発コンサルタントである Andrew Huffer（オーストラリア）が編み出した、問題解決のフレームワーク（下の画像）6 ステップを体験した。



The Solution Focus Model

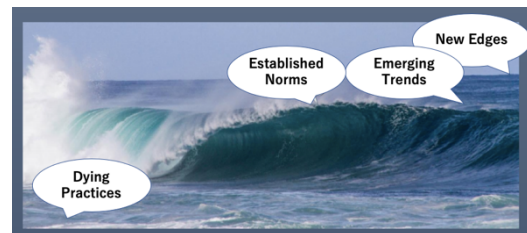
以下の 8 つを明確して問題解決を図る

- ①Platform—最終目的は何か
- ②Future Perfect—具体的な目標
- ③Scale—自分の現在地と進捗
- ④Counters—活用できるリソースや経験
- ⑤Affirm—現状を肯定する
- ⑥Small Actions—小さな一歩の重要性
- ⑦Review—一旦立ち止まり進捗を振り返る

⑧What Else—他に役立っているものは？

Wave Analysis

「Wave Analysis」とは、実現可能な計画をたてるために現状を Wave（波）が生まれるプロセスを用いて分析する方法である。



Dying Practice : 時代遅れのもの

Established Norms : 現在の標準

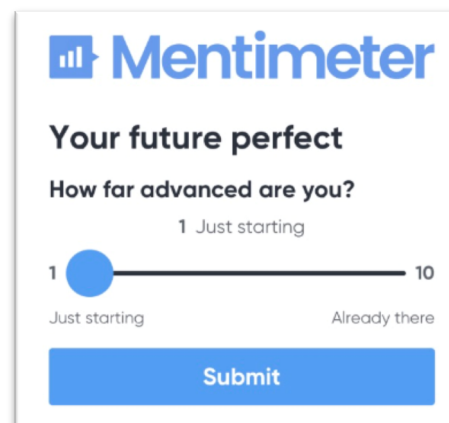
Emerging Trends : 勢いはあるが実験段階

New Edges : 世界を揺るがす新たなアイデア



Future Perfect

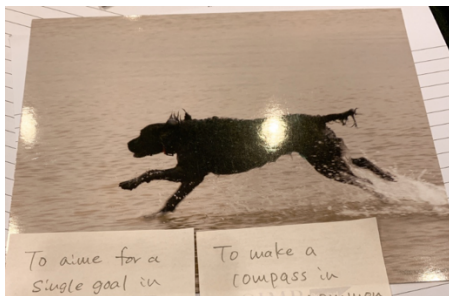
具体的な目標と、それに対する自分の現在地を確認するもの。「Mentimeter」を使用して、自分の目標に対する現在地を確認した。



Current Picture

目標に対して、今の自分の状態を表す写真カードを一枚選択し、選んだカードが何を示してい

るのか、共有した。



(私が選択したカード：「1つの成果に向かってまずは走りきる」という意味)



Existing Resources

既存のリソース（資源）を活用する



Small Steps

自分の自己評価を振り返り、さらにもう一歩進むために、普段 100%の力で取り組むことのできていることを1つを見つける。そして次の一歩へ踏み出す。

分科会への参加を終えて

少し難易度が高く、現地では理解に苦しんだ内容だったが、上手くオンラインツールを活用したことで効率よく、効果的に学ぶことができた。

～おまけ（面白かったもの）～



ちょっとしたファシリテーションツール。緑＝OK（理解しています）、黄色＝Danger（ちょっと危ないかも）、赤＝Not understand（わ

かりません）と、手を上げて発言しなくても、ホストが随時カードを参加者に出してもらい、理解度を確認していた。

さいごに（感想）



あつという間の2日間で、最初から最後まで常に脳みそたちがギョルルンと異常なスピードでかけまわっていました。普段慣れない分科会という場に参加し、新しいスキルや知識を学ぶという経験と、まったくの異国の地でイングリッシュオンリーで2日間を過ごすという経験。

最も痛烈だったのは、理解できているのに、言葉にできないもどかしさでした。喉まで意見がかかっているのに、それを伝えようと必死になっていると、次の話題に移ってしまっている、ということが何度もありました。兎にも角にも「恥を掻く」ということが当たり前の2日間でした！

今後も様々な観点からファシリテーションを学び、仕事やプライベートと、コミュニケーション全般において活かしていきたいと思います。



スカラーシップの4人と、最後まで面倒を見てくださった荒金（あらら）さん